

桜の便り

桜の季節の前に旅立ったあなた
残された私は呼吸もできず闇に沈んだ
いつの間にか
心に鎧を纏い
齒を食いしばり彷徨い続けた
魂の叫びが聞こえぬように

月日が流れ
すっかり年老いた私には
錆びた鎧が重すぎる
私は私に戻りたい

一呼吸し
見つめ直す
その哀しみの先に

靄の中から溢れ出す
淡い春の香り
白い病室で

「一緒にお花見に行こうね」と
あなたが言って
その日
二人で心に描いた
一面の薄桃色